WASON
HQ
1104
J74+

July 1894
No. 387

明治十八年初刊

女學雜誌

毎週土曜日發兌

第三百八十七號

要目

城に留守せし賢夫人
苦節に臨みて機務正中、よく忠孝貞の三を完す、敬慕すべし如此き賢夫人。

如今尚ほ避暑に遊ばん乎
慨然時事につきて切言す、彼の悠々の人冀くは韓山風雲の同胞を念へ。

卒業は始業なり
是れ明治學院卒業生の爲に演述したるもの、左れど今の時節の公讀に益あらんか。

沙翁戯曲中一節
明石居士巧にシエクスピアを評す。ヒリプ物語に其文を讀みたらん知巳、須らく一讀すべし。

對外政畧及其評
徳川家康が對外政畧は何如なりしや、並に白川樂翁が之を評せしもの如何に。

明治二十七年七月七日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百八十七號目録

社説

如今何ぞ避暑に遊ばん乎

講壇

卒業は始業なり

此の祝すべき盛典
自から顧りみて何事を學びしやと
此廣き土地、此大ひろ建物
若し其の發揚者の箇々銘々を想へば
凡そ情と、情の形はし方とは別也
諸君此境界に學びたり
他の爲めに盡すとこれ也
何如なる所にも不足なり
次に神學科卒業の諸君
大丈夫にして成功の確かなるもの無けん
傳道者たるに未だ十分ならざる故也
万事素より神の力によつて成る
殊に我國には
フランセス、ザビエ
されば二部の卒業生諸君
終りに一言したし
新陳代謝の道を念ふて

史傳

城に留守せし賢夫人

論説

時艱憶ニ烈女ニ(江東居士)

徒然草

沙翁戲曲該撤一節(明石居士)

文しらべ

對外政略(徳川家康)
右政略を敬評す(松平定信)

書架

落穂
津田梅子嬢の生物學上の發見
文學者となる法
淺瀬の波第二編を讀む(白川生)

片々

文部省と外國的教師
やまとごゝろ
人種、歷史、政躰上の迷信
歷史を重んぜよ
日本本來の宗教
モズームダルの論文

時報

文部省家事科檢定試驗問題○女生徒の華奢を戒む○同志社女學校○京都府看護婦學校○女子の不就學◎貞女本多よし子○貞婦渡邊ゆき子◎アンドリー、及びブシユテル兩女夫漫遊の報告○横濱婦人矯風會

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百八十七號

明治二十七年七月七日發兌

社説

如今なほ避暑に遊ばん乎

夏の暑さ、將にきびしからんとす。學校もおほ方は休みとなりぬ。例年の例にたがへば、避暑の時節は既にちかづきたるなり。

むかし我國には、夏休みなど云ふものあらざりき。寒中は寒げいこを爲し、暑中は土用げいこなど稱えて、殊更ら奮發せり。是れ、尤とも苦しき時に、尤とも勉强するの主旨にて、鍛練の道を得たり。

然るに、近年、敎育に西洋の風を學び、學校には、すべて夏休みと云ふものを置きてより、避暑と云へるもの、無かる可らざる一風俗の如くとはなれり。

そもく、學校の夏休みなるものは、學校日常の科業をば休止するの主意にて、全躰に學問を休むの精神にはあらず。夏の敎塲は、廣野開氣を善なりとし、校内の陰鬱單調なる學問を止めて、之を戶外に移すの主旨のみ。豈に必らずしも皆無の安息を要すと云はんや。

然るに、學校の仕組ひと度び誤解せられて、此の誤まり再たび誤傳せられ、遂に避暑は文明世界に欠く可らざる一風俗と見做されたり。玆に於てか、苟くも紳士貴婦人を以て自から任ぜんほどの人は、夏に際して出遊せざる法やあるとて、家に留まるを貧乏の符徵と心得、何處にか避暑せねば、大なる恥辱を受けたる如く感じて、扨ては、夏の遊びと云ふもの、彌よ流行せり。

夏や。汝、もし人をして懶怠せしむるのみならば、來らざるに若かず。此の世話しくして貧乏なる日本國の時勢にも遠慮せず、貴公子が馬に乗り、佳人が蓮步を轉じたらんが如き悠々緩々たる來遊は、暫らくお斷はり申すの外なし。夏や、炎

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

炎として熱怒すらく、余は決して人を懶惰にするとを望まず、古人の如く、反つて勉強せられんとを望むなり。勉強せられたらんには、清水を呈せんとして潺湲として流るゝに候はずや。涼風を呈せんとしてそよ〳〵吹かせ候はずや。懶怠の諸君には、水も風も何の益なかるべし、之れによつて、余が精神を知ろし召せよと。

夏の眞意は左もありなん。我國の氣候、温帶に居て中和なり。冬の甚しく寒ぶからざるが如く、夏も左程に酷烈ならず。至つて心切に加減して程好き温和を呈するにもかゝはらず、之をしも尚ほ忍びがたしとは、何たる我儘ぞ。衣を輕くして、潔よく働らけば、清風、たもとの邊りより起る。酌んで、地中に水をさぐれば、何處の井か、冷泉なからん。吾國の如き、住ひ佳き國は、万邦ほとんど比ひあらず。

然るを況んや、如今、邦家に事ありて、風雲の變大ひに韓山に動かんとするの時節に於てをや。而も、同胞の壯年、國民に代つて兵に役し、一旦事起らば、忽まち生命を献げんとするの愛國者一万數千人、今や既に半島に露宿せり。彼地、夏きはめて熱く、ことに陰濕ありて、朝暮尚ほ快ならず。風甚はだ生ぬるく、水尤とも不潔にして、食に野菜を欠く。左なきだに、風土俄かに變はりて、住み心地あしかりなんに、ましてや、氣候、飮食、すべて夏に佳からざると斯の如きの異境に陣す。帝國軍師の苦痛それいかにぞや。

左るを、都に住まふものは、朝たに草露の涼風あり。夕べに、河邊の螢火あり。日中酷度の折柄には、氷と云ふものもありて、もし其の一杯を傾むければ、身内身外、忽まちにして秋來る。何んぞ、其の優幽にして。快味多きや、然るを、尚ほ足れりとせず。日に數杯の氷を用ひて、滿ちたりとせず。團扇を弄して、足れりとせず。晝は晝寐し、夜は早寐し、而も、朝は晩くまで起き出でずして、ダルシ〳〵となまけ乍ら、尚ほ滿足せず。到底避暑の外なしとて、わざ〳〵山地海邊に遊ばんとす。嗚呼それ何たる無情の人ぞ。

軍に軍規あり。日熱すれども、傘を用ひがたし。喉渇すれども、水を飮みがたし。たとひ、たま〳〵風ありとも、胸を開きがたし。同胞の將卒は、彼の熱地に居て、而して、此の熱律の下に順從する也。之を吾輩在内の悠々者に較ぶるときは、何如なる懸隔ぞ。諸君、愼しんで戒心せよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

講壇

卒業は始業なり

右、明治學院卒業式演説の大意。卒業は始業なる旨を説きたりしかば、採て題とす。一般學生の參考ともならばやと思ひて、こゝに掲載せしむ。一校の私事にあらず。

普通科、及び神學科卒業の諸君。

此の祝すべき盛典

に列して祝意を表することは、敢て人に後れじと存ずれども、

抑そも、卒業と云へる恵福の彌や増したるは、即はち責任の一層殖えたることにて、諸君は新たに一段階を登られたるものなれば、今日の卒業は取も直さず、一種の始業と存ぜらる。

此處ろまで到着せられたるが如くして、實は出立し、既に成就したるが如くして、更に着手せらるるが、すべて卒業者の心得ならん。左れば、此の慢心の兆ざす時、惰氣の生じ易き時に於て、凜然たる覺悟を發揮して更めて新らしき境界に進入せらるることは、極めて大切ならんと思はる。先づ、普通科卒業の諸君。諸君今ま、

自から顧りみて何事を學びしやと

吟味せば、今更ら無一物なるが如きに驚ろかるるならん。凡そ善く學びたるものは、反つて斯の如く思ふべきものにて、是れ寧しろ大ひに得たるものあることを證する也。余は、之を祝す。左れど、此に極めて明白なる一事あるに、其事のあまりに明白すぎるを以て、諸君は此際或ひは失念せられたるならんか。余は、更ためて此一事を注意すべし。抑そも

此廣き土地、此大ひなる建物

此の完備したる一大學校は、諸君が万一の報酬の爲として拂はれたる月謝金によりて維持せらるるにもあらず。教師役員諸君が好意盡力によりてのみ維持せらるるにもあらず。日本人の獨力をもて維持せらるるにもあらず。實に、外國にある篤志の人々が、勤儉義捨して寄せられたる莫大の金によりて斯の如く立ち斯の如く維持せらるるにあらずや。而して、其寄附金を一つに合して用ゆれば、斯の如く大袈裟なれども、

若し其の義捐者の箇々銘々を想へば

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

僅かなる生計費のうちより、非常の倹約を為して義捐せられしもの多かるべし。夢にも彼の宏大なる寄宿舍ほどの家に住ひがたき人多かるべし。然るに、諸君は、此等の不自由の中より搾り出されたる涙の義捐金によりて教育せられしものなり。其住ひし寄宿舍も、講堂も、器具も、教師の教授も、何れか此の海外の義捐によりて維持せられざりしものある。諸君は、其の空氣を呼吸して生長せしものにあらずや。

凡そ、情と、情の形はし方とは別也

たとひ、寄附金の用ひ方、使ひ方、即はち寄附の眞心の形はし方は、何如にてあらんとも、寄附者の眞情は之によりて增減すべからず。感謝して明らかに掬すべきものあらずや。其形を後にして、其心を推し、其の成敗を忘れて、其情を酌むは、心ある士らひの覺悟ならん。諸君、直ちに在外篤志者の眞情を察しなば、好意、感激に堪へざるべし。彼等は、願ひの音を傳へ、又、人を善くする爲の教育に其金を使はんとする也。所望眞とに明白、好意實に感謝の限りならずや。世には、侵略、又は、攘夷など言へるともあるに、未だ曾て此地を踏まず、未だ曾て此國を見ず、人種も、言語も、歷史も、利害も全く異なりたる外國人の爲めに、かゝる好意を施こすは、殊勝の事にあらずや。

諸君、此境界に學びたり、

故に諸君は、永久此好意を記臆し、其摸範に則とり、何處にゆくとも、此の傳へられたる精神を忘るゝとなかれ。諸君、今や普通の學科を了りたり。之よりして、何如なる方向に身を獻げんとする乎。それ、何如なる所に入りたりとも、願くば、前の一事を忘却し玉ふ勿れ。此校に教養せられたる特色は、即はち前の一事を記念するとにてあれ。此一事とは、

他の爲めに盡すとこれ也

義理の故ならず、不得已の必要の爲めならず、酬ひを求むるが爲めならず、單に純然たる好意を以て他に盡すと云ふの一事は、此校の形を建設したる精神なり。諸君、此の精神を同窓の旗じるしとせよ。世に人多くして、何如なる仕事にも人の餘るほど多しと云ふ。然し、何如なる仕事にても、上の方には、人が不足なり。殊に、人の爲めに盡すと云ふ人は、

何如なる所ろにも不足なり

諸君、請ふ此の不足を充たせ。此の不足は諸君を需要しつゝ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ある也。凡そ、利己の人ほど卑しきはなし。生命を得んとして之を失ひ、眞理を學べるが如くして暗く、世に盡すが如くして實は功なく、有てるが如くしていつも足らず。斯る利己的の人は、大日本に不必要なり。

次に神學科卒業の諸君

諸君は、神の聲となり、神の光となり、神の道を生ける肉躰に形どりて之を傳へらるゝもの也。其の光榮限りなきと同に其の責任も亦た限りなし。其責任の無限なるが故に、諸君が苦心の重大なるヿを推察す。されど、もし信じて此の聖職を奉行せらるゝときは、傳道の職務ほど、

大丈夫にして成功の確かなるもの無けん

凡そ、物の恐ろしきは、吾に優る力の吾が進路を妨ぐるが故なり。凡そ、功の成らざるヿを懸念するは、吾が事を成すに其道を辨知しがたきゆへ也。然るに、天地の主の名に於て、其万能力によりて、其道を行ふと云ふ。かくほどに堅固大丈夫なるものあらんや。さるを、此の傳道事業に對して、兎角に失望の聲あり、時に不平の聲あり、更らに危懼の色多くあるものは、何故ぞ。これ、

傳道者たるに未だ十分ならざるが故也

傳道は、神の力によれども、此力を受けて發表するものは、人也。故に、其人にあらざれば、其事を成すヿ能わず。世には、愚論もあるものにて、神が愚かなるものを使ひ玉ふヿの一句を誤解し、昔し使徒は、税吏なりき、漁夫なりきなど稱へて、其人にあらざるものが尙能く其事を成し得ると思ふもの少なからず。成ほど税吏や漁夫が聖なる使徒となるヿもあるべし、そは「人」にありて其の身分にあらざるが故也。愚かなる人が、傳道に大成功するヿあらん、そは世の事に愚かなるのみにて、眞とは人物なりしに相違なし。何如なればとて其「人」にあらずして、其事を成し得べき天理あらんや。

万事素より神の力によりて成る

左れど、此の力の寓するや、適當したる形を撰ぶ。人物にあらずして、安くんぞ、傳道上の神力を受るヿを得んや。光は何處にもあれども、鏡ならねば反射せず、火は所々に燃れども、薪にあらねば炎々たらず。神の光をうつし、其熱を傳ふるものも、亦た其人物たらざる可らず。

殊に我國には

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

學を好むの習慣あり。又、道を修むるもの多し。身を公に奉じ、義に勇み、剛膽不敵にして身命を物の數とせざる烈士多し。此等に接して、其さえづるが如き議論を聞き、其の骨を枯らし肉を削る迄に鍛練する修道者に交はり、義の爲めには水火の中にも飛込み、決心金鐵よりも尙固き人物を見たらんとき、之に同情を表し、之に應分の敬意を表すると共に、亦之を痛み、之を惜しみ、一種天來の大慈悲、大抱負を以て、超然として上より之を誘引せんとする丈けの、實力ある修養なく、やゝともすれば、ケンカ腰に構へ、又は一種の恐氣を生じ、時には自から疑がい、左なくば敵愾心を起して、之に對せんとする如き小ひさき事にて、何如で、日本の高等なる人種に傳道するとを得んや。

フランサセス、ザビエ

はさすがに卓見あり。日本に傳道せし最初、印度に宣教師の派出を乞ひし注問の文に、凡そ日本に來るべき宣敎師は、第一、學問ありて理窟を辨識する力あらざる可らず。第二、道德堅固にして、實行潔白ならざる可らず。第三に、大膽不敵にして身命を物ともせざる氣慨なかる可らずと。此の注文は、三百年後の今日にも、依然として適當せり。左れば、諸君、今や、神學を畢えて、方さに傳道に從事せんとする時、もし吾に不足を感じなば、常に修養し、敵にだも就て學ばんとする高潔濶大なる精神を以てたゞ道の義を戀ひ求め玉ふべし。此の決心と、此の覺悟とを以て、傳道し且つ修養するとなくんば、到底、目ぼしき高等人士を神に誘ない來ると能はざるべし。故に、諸君は、道を傳ふるの人にして、亦た道を修むるの人也。こゝに神學を畢へて、更らに道義を學び玉はん門出でなり。

左れば二部の卒業生諸君

今日は、歸着點にして、亦出發點なり。やゝ成功して、更に大なる成功に向つて戰ひに出んとす、此時尤とも戒心せらるべき時也。十年西南の役、官軍の將士が尤とも恐ろしかりしは、城山に巨魁を取こめて、もしや谷間に追込んだる虎を一打にせんとする時、此時尤とも恐ろしかりしとぞ。覺悟なる士人の情はつねに如此し。家康が、勝て冑の緖をメよと言ひしは、殊更ら敎訓を垂れしにはあらず。關ヶ原大勝の後、更めて大事業を現實に感觸し、サテ是よりと思ひし一刹那、彼

は戰慄して懼れしならん。老練にして周密なる家康などの心は左もあるべし。彼は、此時尤とも戒心したる也。卒業の榮を手に握つたる諸君は、現に斯の類の場合に立つものならずや。今日、諸君は、現實を感ずべし、今日諸君は、責任を感ずべし。願くは、謹愼にして、嚴肅なる覺悟を發揮して、此の首途の所存を固め玉へ。

終りに一言したし

玆には、日本基督敎會の諸君、多く居ますべし。諸君、吾敎會の大抱負を達するには、人物なかるべからず。而して、人物の養成は、敎育にある耳。願くは、內外此學院を助けて一層人物の養成に盡力せん。左れど、敎育に心がくるほどのものは、

新陳代謝の道を念ふて

つねに、先進、後進に其地を讓るの覺悟なかる可らず。此の覺悟なくんば、敎育せざるに均し。學校に英才を開發し乍ら社會に此の英才を伸長せしめざれば、敎育に心がくると言ふとを得べきか。日本基督敎會の事業は實に多し、先輩諸君が既に建設せし事業を後進に讓つて、進んで未着手の創業に從事すべき仕事は、實に澤山に澤山ならずや。何を苦んで戀々舊地位を惜しみ、颯發たる後進英才の路を防がんとする乎。聖書を讀みて、一と度び洗禮ヨハネが心胸に入れば、其の美くしきに感激して泣かざるとあらず。曰く、彼は必らず榮へ、我はいよ〳〵衰ろふべしと。眞とや、新郎の友が、新ひよめの來るを悅こぶが如く、後に來らん人の榮光を感謝する高貴廉潔の精神なくば、人才敎育のことは到底語る可らずと愚考す、

史傳

城に留守せし賢夫人

其一

智謀軍略、眞田父子の如きは稀なり。北條よりして、德川石田に至るまで、其が志を得ると喪ふとに甚たく掛念せしもの抑そも故あり。

眞田安房守昌幸は父なり。伊豆守信幸は、長子なり。佐衞門

佐幸村は二子なり。信幸は、安康が姫分となりたる忠勝の娘を娶り、幸村は三成が親友大谷吉隆の女を娶りたり。

信幸が安康の姫分を娶るときや、他日の變を推測りて父に問ひける。もし此縁談を結ばせ候上は、末永く内府と偸るとある可らず、父上の御所存如何に候やと聞しに、父昌幸は、此事結構なり、永く忠勤奉公して餘念あるとなけんと申したりける。斯して首尾よく結縁せり。信幸は、時に上州沼田の城に居たり。

扨て、家康、上杉景勝退治の爲め關東へ進發せしとき、昌幸幸村は信州上田の城より、信幸は沼田の城より出でて之に隨がひしに、石田三成、時こそ佳けれと大坂に兵を聚げ、諸國に檄を傳つて諸將を招きしが、取はけ眞田父子を招くとねんごろ也。

野心勃々たる上に、豐臣氏には因縁淺からず、德川氏には兼て平らかならざりし父昌幸は、二男幸村に語らひて、三成に應ぜんと決せしが、此事、信幸には談ずべからず、竊かに西に赴かんとせし處、幸村は一應兄に知らせ申さん、不同心ならば差殺さんとて之に語りしに、信幸もとより諾なうべくもあらず、涙をハラ〳〵と落して、父の變志を歎き、弟を叱して退けたり。

其二

初め、信幸が沼田城を出んとする時、夫人竊かに諫むるよう、御父樣の事ながら御志知れ申さず、つね〳〵御心置可被遊とありしに、信幸、果して思ひ當るとなりける。

昌幸、幸村。野州犬伏宿より軍を引返し、大坂方に應ぜんとて途に上州沼田を通過の時、先き立つて使を家老供へ遣はし、御用ありて上方へ罷越すに付、其元にて暫時休息成さるべくとありしに、信幸の夫人本田氏、使者に尋ねさせらるるよう伊豆守樣にも御同行ありやと。然らずとの返しによりて夫人は既に事態を明察し、即はち返事ありけるは、上方へ御用にて御越被成候由御大儀に思召候、此城は伊豆守殿御出馬の時急度我等に御預け置被成候間、城内へ御入被成候事必ず御遠慮被成可被下候御宿を申付け候間それへ被成御休息被成 かしと。則はち家老共を召出し堅く諸門を守らせ、廣間には長刀を女郎衆に持せ、親から出でゝ万端下知す。

昌幸かさねて申すよう、異志あるにあらず、但だ孫供を見ん

とする耳と。されど夫人は嚴然として答へて、もし强ひて御入城あらんとせば、留守を預かりたるものとて、不得已、御手向ひ申すべしとありしかば、昌幸歎賞して、嗚呼、將種は格別のものよと驚ろかれける。

夫人本多氏思ふよう、もし男を遣はさば、定めて喧嘩を仕るべしとて、はした女の丈夫なるを二三十人、赤前垂を仕らせ、棒を持たせ、昌幸の宿陳に遣はし、支度調のひ候はば早々御立被成候へと聲高に追立て候へと命ず。昌幸父子を初めとして、軍兵皆な疲れ、玆にてゆるりと休まんとせしが、追立られ、敵地に在るの心地して、遑々出で立ちたり。暫らくして、伊豆守より急使到來し、事情くわしく申來れり。

夫人此の時家老共を呼出し、申さるゝよう、此度伊豆守樣、御陳立遊ばし、家中諸士皆々御供致し留守の内殊の外淋しく徒然なるべし。よつて、此日は諸士の女房子供殘らず召し集め、氣ばらしに酒を振舞ひ可申間其旨相ひ心得可申、又吾等子供兩人共に幼少の事ゆへ何れも赤子供を殘らず召し連れて參るべし、皆な大廣間にて遊ばせて樂しまんと申さる。よつて諸士の母子殘らず我も〳〵と城の本丸に集まり思召のほど有がたしと悅こび合へり。時に夫人、家老を近く呼び玉ひ、始めて昨日伊豆守どのより來りし御狀の事を語りて、此度御父子敵味方と成りて本國に御歸りなれば、留守中其の心得にて留守居とも念入れべき旨同樣に仰せ越され候間、もはや昌幸殿は敵なり、今日此城へ御立寄り万一我等親子を人質に連行き玉はん事もやと存じ夫に付家中の諸士の妻子も同樣なれば、振舞に事よせ殘らず本丸へ入置きたり、大手搦手の城内堅く閉ぢ矢狹間配り念入るべし、若し無理に城内に入り玉はゞ一戰に及ぶべしと命ず。左れば、夫人より昌幸へ返辭の中にも、伊豆守方より差圖無之内は、御城入は相成不申、押て御入候はゞ一戰に及び兩人の子供差殺し其後御入可申と手を放ちたる挨拶ありける。

其三

關原の戰後、家康は、三成に劣らぬほどに眞田父子を怒り、死罪無論と定まりしに、信幸、死を決して命ちを乞ひ、夫人の父、本多忠勝も亦强ひて請ひたり（蓋し夫人より懇請しければ、）遂に命は助りたり。信幸忠孝兩つ乍ら全くしたり。之に助けて苦節に斷然たる處置を爲さしめたるは、賢夫人本多氏なり。實に忠勝の娘なり。實に家康が姫分なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

論説

時艱憶烈女

江東居士

時艱にして英雄を憶ふとは、國步艱難の時に當り、有志士の軫念する所、余輩も亦た今日の日本に對し、うたゝ此感なくむばあらず。然れども、英雄なるものは、屢得る能はざるもの、唯一國民たるものは、此非常の時に際し、同心、戮力、誠意、誠心、生命を國と道とに捧げ、斃れて已むの一大決心あらば、庶くは此帝國の獨立と幸福とを永遠に保持するに庶幾からむ。是れ、豈優々安逸して、徒らに花を墨江に惜み、劇を歌舞伎に賞するの時ならむ、噫、明治廿七年の日本は、實に夜半、鷄を聽きて蹶起し、中流、檝を擊つの烈士を要す。日本男子たるものゝ天分、亦た重遠なりと謂ふべし。然れども、余輩は、啻に男子のみに責を置かず、實に日本婦人の大決心を促がし、其興起奮發を望まむとす。時艱にして烈士を憶ふと、同時に、又た、烈婦を憶はずむばあらず。

今人、口を開けば、輙ち四千萬同胞云々と絶叫す。而して、殊に知らず、此四千萬なる總數の半數は、實に婦人にして、男子の內助となり、一家の整理者となり、間接に、隱然に、社會を動かすの幇助者たるもの、此中に存するあるを。若し唯、男子の側面のみを觀測して、日本國家の運命は、偏に硬骨なる陽性の肩上にのみ息へりと思ふものあらば、是れぞ、全國生靈の大半を無視したるものと謂ふべし。余輩は世上の賽豪傑者流を嫌ふ、彼等は面色と唇頭とに於てのみ豪傑なり、女性を塵芥視して、自ら勇者の本色となすが如きは、固より識者の笑ふところ。余輩は寔とに女性を重むず、重むずるが故に、囑望することも亦た深く、且つ重し。滿天下の同胞姉妹よ、男子のみをして、國家を憂へしむる勿れ、今日は日本男子が一身を賭して、乾坤一擲の大活劇を演するの時なり、而して女子が內に在り、貞烈嚴肅の決心を以て、能く男子をして內顧の憂なからしむは、婦人たるものゝ天分にして、又た烈婦たるものゝ覺悟にあらずや。余輩が時勢に感じ、世局を觀て、日本婦人の興起を望む所以の者、實に已むを得ざるなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

試みに首を擧げて、我國現今の有様を一看せよ。之を內にしては、議院の紛爭、內閣の非政、政黨の軋轢あり。而して立憲の美菓未だ其一二を收むる能はず、政府は解散を濫施し、國民は奔命に疲かれ、餘波の激する所、大勢の趨く所、料り知るべからざるものあり。之を外にしては、東洋の風雲日にます〳〵暗黑を加へ、朝鮮事件の如き、危機一髮、或は我帝國の安危に關せむとす。加ふるに、條約改正の如き。結果如何によりては、我全國を擧て焦土と爲すの覺悟なかるべからず。其他、宗教、敎育、實業等凡百の事、其革新と進歩とを要せざるものなし。余輩不肖なりと雖も、軀に三頭六臂を有せざるを憾む。宜なるかな、近來多數有爲の士が、身を挺んで、公に報い、一身の私を顧りみるに遑あらざる。余輩は尙ほ全國四千萬の國民軍が奮起して、此一大革新の時機に應ぜむ事を切望す。

男子生れて、此非常の時に際し、自家の手腕を揮ひ、國家に報ひ、生民を濟ふ、豈人生の一大快事にあらずや。然りと雖も、非常なる事を成さむとせば、非常の決心なかるべからず。策多くして誠少く、文富むで實乏しきもの、利を見て義を遺るゝの人に至りては、余輩其可なるを見ず。我帝國の運命は此種の人を要せず。必ずや忠貞剛健、ハンプテンの如き、ミルトンの如き、南洲の如き、甲東の如き、人士を待つて、爾後僅に能く狂瀾を既頽に廻すを得べし。而して今日は實に此種の人士の勃興を見むとす、否な見むことを望む。

公平に論ずれば、現今民間志士の性行、心術、運動、欲望等子細に觀察して、間然すべきもの頗る多しと雖も、其中、豈に眞に國を憂へ、時を傷み、身と財とを公に奉し、鞠躬斃れて已むの士なしとせむや。況や時勢と民心は彼等を驅り、眞摯熱誠なる境界に行かしむるものあるをや。況や又後進の士が奮發激昂、以て大事に當らむとするもの續々出現し來るに於てをや。帝國の前途較、意を强ふするに足れりと謂ふべし。

余輩が切望する烈士は、世間或は是れあらむ、而して其內助たり、後援たる、婦人は如何。烈士は烈婦に配せざるべからず。世間の廣き、婦人の多き、實に貞烈の婦人に乏しからざるべしと雖も、余輩は尙ほ杞憂に堪へざるものあり。否な、時世の必要に應ずる丈け、其丈け多くの理想的婦人ありや、將

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

た、しからざるか、頗る考慮を要すべき事と思惟す、蓋し當今日本多數婦人の通弊は、其才能の缺乏にあらず、其敎育の完全ならざるにあらず、其社交の圓滑ならざるにあらず、只だ自己の凛然たる覺悟の缺乏に存す。夫れ、安逸富貴は誰人も冀ふ所、辛苦貧賤は何人も厭ふ所なりと雖も、所謂其道を以てすれば去らざるは聖人の敎。況や時世の必要よりして男子一たび身を國家に奉ずれば、其生涯或は困難轗軻の極、家に檐石の貯なきに至る事あるべし、或は當路者の忌諱に觸れ、囹圄に幽死する事もあるべし、或は志を蹶らして海外萬里に客死する事もあるべし、太平時代の如く、安佚逸樂、婦人の手に老死するは、當今烈士の願はざる所、又た能はざるところなり。貞操中道にして、幽冥途を異にし、富裕貧困、朝暮の間、其地を變ずる如き、非常の場合に於る、婦人の覺悟は、亦た容易ならずと謂ふべし、貞人在まさば、家庭を整理して、內顧の憂なからしめ、彼の事業と、決心を翼賛し、彼若し不幸にして世に就かば、假令、暗燈の下、他人の嫁衣裳を縫ふも、以て兒女の薫陶を怠るなく、家道の振作を念ひ、亡貞人の遺志を失墜することなく、結髮より死に至る迄、終始一貫、婦道を守るべし、斯の如くにして、余輩の理想する所の烈婦たるに庶幾しと言はむ。

予輩は恒に慷慨すらく、現今我邦多數の婦人、殊に中以上に位ひする婦人は、甚はだ余輩の冀望する所に反すと。見よ、彼等の服裝は如何に陋巷の藝妓然たるよ、彼等の來賓に接する如何に橫柄なるよ、如何に演劇に狂するよ、如何に夏期旅行に忙がわしきよ。如何に救貧の念に乏しきよ、黑漆の人力車、金色の指輪の彩色爛然たる外、彼等の肉體精神より發する光輝は燕石にも値せざるべし。而して怡々として悅び、嬉嬉として笑ひ、たまたま、貞婉秋花の如く、凛烈松栢の如き婦人を覩れば、古風と稱し、野暮と稱し、田舍臭しと誹り、恰も流行後れの夏帽子視するに至る。從て內行の稱すべきなく、婦道の見るべきなし。嗚呼薄弱、此の如き婦人、安むぞ、能く貞人の事業と決心とを現在未來に助くるとを得む、徒らに貞人の事を誤り、財を糜し、名を汚すのみ。

エドワードカアペンタアーなる學者は、歐米今日の男女間の愛情結婚等を慨嘆して、今の世には眞の戀愛なし、在る所は、商業的結婚なりと云へり。言辭矯激なりと雖、移して以て、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

上述の如き、婦人を許すべし、寄語す、滿天下の操正しき同胞姉妹よ、余輩は切に望む、願くは、今日の時世に鑑み、天の婦人に命ずる職責を重むじ、時流を抜て、卓然自立せよ。而して男子は、進むで公に報ずべし。婦人は內に在り家を治べし。男子は、生命を惜まざるべし。婦人は、貧窶を甘ずべし。其れ此の如く、內外一致、陰陽調和、天下の事初めて成すべし。若し義勇、公に奉ずる點に就き、逡巡畏縮することあれば、是れ、男子の責なり。貞烈、內を齊ふ能はずむば、婦人の咎なり。彼の雛人形的奧方、藝妓然たる妻君の如きは、現日本國家の必要を感ぜざるところなり、同胞姉妹、我國第二維新の蕭何たるべきは其れ唯だ卿等の任にあらずや

早春寄㆓寒山兄㆒問㆓歸期㆒二首　　江東

貧居無事掩㆓柴扉㆒。麟閣釣臺夢兩非。只有江東梅信好。春寒輕勸待㆓君歸㆒。

二

相遇相歡是宿緣。斷金情交未㆓期年㆒。鳳城豫卜君歸日。與㆑他早鶯孰後先。

つれぐ草

沙翁戲曲該撒一節

明石居士

ポルシア入場

ポルシア　我が夫ブルタス殿

ブルタス　こは、ポルシヤ。何故ありてかくは今頃起き出でたまひし。おことが其からだ此生寒き朝風にあたりては宜うあるまい。

ポルシア　それは我が夫にも同じとにて侍り。ブルタス殿、御身は今朝いつになく妾ひとり臥戸にのこして脫け出でたまひぬ、夜前とても夕餉のをり何思ひたまひてか座を立ちて深き思念のある如く、太き息して腕を組み、そこら一ぺん歩みたまへり。何故にて其樣には爲給ふぞと御問き申して候らへば常にもなきおん顏もて眺めたまふ。懲りずまに推しかへし御尋ね申せばおん身は頭りを掻きむしり、何

御氣に召さず、勝へがたくてや足もて床を踏み鳴したまひぬ。こは何とせん、其由知らでやはと猶も伺ひ申し侍りつるに應答は爲たまわず、荒々しくおん手を振り、とゝ立ち去れよとぞ示したまふなる。今さへある其おん怒り此上劇しくおさせ申しては相なるまじ、これは誰にもあるならひ一時の癇癖程なく愈えやしたまふらむと其儘引きさがりて候らひしに左はなくて餘程のおんいたはり、食事も爲さらず、お話しも爲給はず、御睡眠さへ妨げて、昨日までの我が夫とは異人やうに見へ侍り。いかにブルスタ殿、常にはなき御癇癖おん心を惱めいためし其上に身の瘠見ゆるそれまでにわづらひいたつき玉ひては日頃の君とも思ぼえがたし。あはれわが夫御心勞の逐條わなみに語りきかせてたまひねかし。

ブルタス　イヤ。別段のともない、少しく氣分すぐれぬまでのこと。

ポルシア　日頃賢くおはす我が夫御氣分すぐれたまはずば、その御養生は遊ばさる筈。

ブルタス　何をいはるゝ、われは疾より養生は爲してをる。サ、ポルシア、床へ往にたまへ。

ポルシア　わが夫には眞實御病氣にておはすならばなど胸もあらはの其おん姿にてさまよいたまふ、又この爽快らぬ朝の濕氣を吸ひたまふ。これをしもおん恙ありと申すべきや、御養生なしゐたまふといはれ候か。おん恙ありと宣ひながら泰き臥戸を忍びいで、夜氣を冒し、濕氣にあたり、自ら恙を增したまふとは何事ぞ。ブルスタ殿、恙ありとはおんいつはり、御身の御心中深き御思慮のとありてかくはすぐれさせたまはぬならめ、其御心勞わなみはおんみの妻として知るべきはづ、明したまふとて怪しうはあらじ。甲斐なき此の身嘗て一たび御氣に召しゝを幸に、又おん身がくさぐさ御愛情のおん宣誓ことには相結びて一體となり、我身はこれおん身のもの、御身が半身ぞとのたまひしその大なるおんちかひを恃みとしてこれ此の如く膝をりしき、懇願いたすになん、何故おん身にはかく思ひ苦したまふ、又今宵しも訪來たまひし六人七人の御仁この暗夜にさへ各〱顏をかくしゐたまひしは如何なる故にて候ぞ。

ブルタス　吁こりや、ポルシア、跪くには及ばぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ポルシア　はて、おん身さへ優しうなして下されなば固より跪きは致すまじ。ブルタスどの、前かど婚姻の御約束にはわなみがおん身に拘はる秘事に與り侍るとのみは取り除け棄てゝ候ひしか、告げたまへ。食膳の御給仕、閨閤の伽、さては徒然の話相手かゝるとばかりにて妾はおん身に一躰となり侍りしにや。唯幸あり樂みある時ばかりおん身が伴侶にて候か。若しもこれのみにて候ひなば情なやポルシアはブルタスの侍妾にて正しき妻にては候はず。

ブルタス　そはいはるゝまでもなき我が正室、わが生命に均しく愛でいつくしむものなるを。

ポルシア　まことそれが定ならば此身の秘事にはわなみ與り知るべき筈にては候はずや。成程わなみは女子にて侍り、去りながらブルタスともいはるゝ人の妻とし娶りし女子にて候、女子は女子、去りながら嘗て世に聞えたりしケートーが女にて侍り。かゝる父をもち夫に連れ添ふわなみをば淡き世の婦女子等と一般に打見たまふか、心得がたし。あはれ其密議わなみに聞かせて玉はれかし、必ず漏らしは得いたさじ。これ見そなはせ、この腿に我と我が傷つけて、いさゝか氣丈の徵候となし侍り、傷手に堪ゆる我身ならいかでわが夫の秘事を包みおほさでありぬべき。

ブルタス　嗚呼神々、あはれ此身を此の貴き妻が恥しからぬ夫となしてたびたまへ。

（樂屋内に戸を敲く音す）

ソレ、〳〵、人が敲きをる、ポルシア、しばし去んでたも、何角のとは後刻また、すべて此中のこと、わが憂容の仔細のこさず打明さん、人や見る、早く〳〵。

（ポルシア退場）

右一篇は神戸女學院英文和譯科にて生徒に課せしものを予も亦隨ひ譯して示めしたるものなり　明治廿七年六月　明不明附記

顔　子

あふくそよ、あふけはいとゝ高砂の
尾上につゝく松のひと本。
夕かほのはかなきやとの愁にも、
樂むみちはかふることなし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文しらべ

○對外政畧

德川家康

三州の主たる時は近國に用心せしぞ。關八州の主たる時は東海東山北陸三道の治亂を考へしぞ。今又日本の主となりては、諸國の治亂をきかするぞ。子細は、異國亂るゝに日本治りたりとても、油斷するは東山義政の茶の湯、大內義隆が學問、今川氏眞が歌道ぞ。今は諸異國も治平なれば日本の政道までなり、若し異國亂るゝ時には、其時にあたつてよき武將をえらび、九州に近き異國をおさへさすべし。既に上古神功皇后異國を退治の後、九州のうち筑後の國に武內大臣を差置かれ、異國をおさへさせたまふ。是異國の王孫權日本をせめんと數萬の人數をいだす。然れども神功皇后三韓退治のやうす、武內大臣九州に居、政道の明白高大なることをきゝて、日本の兵と戰ふとも勝利なからんと、軍勢病にかゝりしとて、呉國の兵船半ばより歸帆す、偏に武內筑紫に居りしゆゑなり云々。

其後人皇八十九代龜山院御宇文永年中、鎌倉將軍七代目惟康執事時宗代に蒙古國北狄起りて中華を治め元と號す。日本を從へんと、度々書翰を賜り使者を立てけれど、日本には不請、是に依て日本の武勇を試みに、兵船千艘渡し、九州の內を亂暴すれども、はかぐ\しき一戰もなく矢だねつきし故、千艘の船無事に歸帆して、日本の武威きゝしよりおろかなりとて、建治四年に蒙古兵船六萬艘渡し、平戶五龍山に着岸す。然るに八月朔日大風吹て、蒙古の船ことぐ\く海中に吹流し、生殘る兵をば八方に散らす、是ひとへに元の世祖弓箭にとりは日本弓箭のおくれなり。是を手いたくあてば、建治の兵船は渡海すまじきぞ。尤もかの大風は賴みにならざるぞ、此時良將をえらび九州に置て、手いたくあてよ、尤も萬里の海上一帆に來る、油斷する事なかれ、かねて覺悟第一ぞ、子細は、身灸をすると又飛火の心得にて、油斷と油斷せざると萬づ考へみよ秀吉朝鮮まで追討の時、朝鮮王武道の心得少しあらば、木曾判官を釜山浦に置き、日本勢を押へさせば、朝鮮進發むなしくなるべけれど、朝鮮數年平治にて、武勇悉く取りうし

なひ、柔弱美麗なりし故、何の子細なく攻亡されたり、秀吉かの柔弱なる事を内々きゝ、弓箭に取ほこりての事也。總て用心は太平の時なるぞ。寸善尺魔とて、異國太平なる時は日本より攻め、日本治平なる時は異國よりせめ、源氏太平なれば源氏をせむるぞ。たとへば隣家の燒くるに、此家の用心せざるはおろかなる事なり(武野燭談)。

○右政略を敬評す

松平定信

文永の頃の武威のおとろへより建治の元兵も來りしとの御事恐感餘りある事は申も憚りある事なれば、只々感泣するのみ。既に文永の頃、唐山の使をきりたるなどは、今にくらぶれば英斷不動の見識にて、そのころはいまだ武をわすれし世の中にあらざれども、上意すでに此如なれば、猶以恐懼戒愼すべき事なるべし(北條のつかひきりたるは壯快のやうにいへども、實は不學無術、遠慮深謀かつてなく、國力をも知らず、敵の情をも察せず、かの神風ふかずばいかゞせん、もとより北條數代にして武を○○もの出來ざるぞ、則實に北條のつみなり)。其餘元世祖の日本をせめしも、秀吉の朝鮮をせめしも、皆弓箭に取ほこりたるとの　御諚、實に奉感も餘りある事也。

其外萬里の海上一帆に來る、油斷するとなかれとて、灸と飛火の御比喩にて、覺悟の有無を示し給ふ、實に武士たるものの頂上の砭針、此上なき御垂戒、奉恐感といはんも恐入ばかりなり。すべて用心は太平の時なるぞ、日本太平なる時は異國よりせむるの御警め、並に朝鮮久しく平治にて、武勇悉く取失ひ、柔弱美麗なりし故、何の子細なく攻ほろぼされたり。秀吉かの柔弱なる事を内々きゝ、弓箭にとりほこりての事なりと　御諚なり。その頃は日本武威さかんなり、太平いく千とせも打つゞく事なれば、かの朝鮮の柔弱美麗の世に似るまじきともいひがたければ、此御垂教の事共刻骨して可奉服膺事也。狹隘なる性の者は、只今にやすんじて餘所の事を知らざる故に、海は品川の如く、川は大川玉川の如しと思ふばかりにて、思慮も只目先きの事をなし、かつて遠慮遠謀に及ぶ事は益なしと心うるやうになり、敵はいつも我が流の註文の如くして來るべしと思ふ輩もありて、かつてひろく考へ遠く慮らざる樣になりゆきては、則上意の三州にては近國、關八州にては三道、今又云々の御深意奉伺候ては、恐入るともいひ盡しがたき事なるべし(婆心錄)。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

書架

落　穂

矢島楫子女史が弔歌

　あつめては國民のたつきとなりやせん
　　山田のいねの落穂なれども

により「落穂」と名けられし故山田米子が遺稿及び追悼の詩歌文章一冊は、櫻井成明氏が盡力によりて此度び鮮明麗雅に印刷せられ、女史が生前の知人朋友に配付せられたり。櫻井君が筆に成りたる同女史が行狀は本誌第三百四十三號に在り。以て精はしく其人と成りを知るべし。今其の日記中の一節を左に抄出す、

廿八日……午後舊き友〇〇兄の來られて共にうち語らひたり兄曰くわれ今より實業家として世に働らかんされど實業家たるべきものは必ず瞞着主義を取らざるべからざるなりと妾之を聞きいと悲しみに堪えずして友にむかひ瞞着主義は必ず棄てざるべからざるを語るも決して聞き入るゝけしきもあらざりき嗚呼われら世にあるは何の爲めなりや金錢の奴隸となりて働くにあらず必ず一つのわれらになすべきの務ありそを果さんが爲めに金錢を使用するを世の人多く誤りて金錢の爲めに奴隸使さるゝはいとも哀れむべきの至りなりしかる上に不正なる働きをなして一時の富貴をえん事を望むもの、心實にあはれなりわれら不正なる金を得んと欲せば一夜のうちに千万金をうるも敢て難きにあらずされどもかゝる富貴は更らに樂みを得るに足らず瞞着主義とは果していかなることぞ我等人類は全知全能なる至誠を以て支配なし玉へる神の下にあるにあらずや一時世の人をくらまし多くの財貨も再び奪はるゝの時來らんわれら艱難辛苦して奪はるゝの財貨を貯ふるは實に愚なるにあらずや妾幸ひに神を知り道を知りたるものなれば必ず神の與へ玉へるの實を天國に於て貯へざるべからず眞に憐れむべきは友なるかな

オー神よ友をして早く御心をしらしめ正義をしらしめ御心にかなはい妾を御使用なし玉ふて友をして御國に入ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しめ玉はん事をクリストの御名によりて聞き上げ玉はんとを切に祈り奉るアーメン

○津田梅嬢の生物學上の發見

名高き顯微鏡學四半年報(The Quarterly Journal of Microscopical Science)の近號には、學士津田梅女史が、米國ブリンモア女子大學の生物學助教授哲學博士モルガン氏と共力して、アマ蛙の卵の元種の割れ方、位置、及びブラストポアの關係等につき、生物學上に新現象を發見したり。此の試驗は、女史がブリンモア女子大學にありし比よりの研究にして、當時及び終末に於てモルガン博士の助力とありしが、最初の發見は主として女史の力に成れり。此試驗は、獨逸の學者、ブルーエル、ルー等の着手もありしが、遂に女史の手をかりて成功し此の學問上に有益なる一の發見を、日本婦人の力にて成就したり。

○文學者となる法

久しく閒居たる此書、近頃ろ一讀したり。同じきとならば、今少し無遠慮に穿ちたらば、面白かりしものを。

淺瀨の波第二編を讀む

白川生

熟々歌道の變遷を考ふるに往古は殊更に歌人なるものなく、歌よむわざなかりしが降て平安朝以來歌道は社會一部分の人の遊藝とはなりにき。千有餘年の昔已に貫之が嘆ありき、彼云ひけらく

いまの世の中、いろにつき人のこゝろ、花になりにけるより、あだなるうた、はかなきことのみいでくれば、色好みの家に、うもれ木の人しれぬことゝなりて、まめなるところにははなすゝき、ほに出すへきことにもあらすなりにけり

嗚呼何が故にまめなる所には穗に出すべからずなりしか。心なもさゝし、誠を始めとすべき歌道が、たゞ言語字句の末に走り、遊技戯藝の類と墮落したりしが故にあらずや。

天下滔々風習に從ひ、時俗に阿れるは今古東西等しく免れ難きの弊也。偉人涙を揮て道の爲に嘆ずるも俗流の甘睡さめがたし、英雄怒を發して世を警むるも凡人の長夢は破れざるなり。あはれ大聖貫之が嘆息も幾多歌人の耳には輕風の如くありき。されば平安朝以來歌道は愈衰へ、歌人は益輕薄に流れ、歌よむわざは遊子閑人の占有物となりき。或は秘術を説て歌を家傳となし、或は復古を論して獨り萬葉風を得たりと云ひ、所謂秘法を知らずんば歌を知らず、所謂萬葉風に合はずんば歌あらずと思ひ、自ら迷ひ、而して人を迷はし、自ら狂し、而して人を狂せしめたるもの殆んど上下千歳の通弊なりき。歌道豈秘義あらんや。和歌豈遊子閑の戯藝ならんや。試に景樹が言を聞かん。

さりとて止むことを得るの道ならず、たとへば仁義の道は聖賢猶病あり。其病めるを見て我等如きはと云ひて其道を退くことを得べけんや。彼の理外の幽妙は仁義の上に立てり。人とありて知らずばある可からず。

仁義は聖賢獨占の道にあらず、否然かせしむ可きにあらず。凡そ人たるもの一日も仁義を欠く可からず、之を換言すれば仁義を行ふは各人の世に對する任務なり。之を知らずんば人にあらざるなり。而して歌道の人心に於ける亦仁義の道の如きなり。之にして若一般人間の行ひ得べき所ならば彼亦然るべきなり。一にして聖人俗流の等しく知り得べき所あらば他も亦同じかるべきなり。然るに歌道を社會

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の一隅——世道に關係少き一階級——の玩弄物となし果てたるは抑も憐むべきの限りならずや。

景樹世に出で、孤身を以て頽波をかへさんとし、赤手をあげて傾屋を支へんとし、雷霆の怒を爲して歌人の迷夢を破り、暴風の聲をあげて歌道の衰頽を嘆せりき。もとより盲者千人の世、下愚は以てうつす可からず、緣なき衆生は度し難きも、亦其叱聲を聞て睡眠を開き、其警語に驚きて迷夢をさまし、以て道の眞意を知り、歌の幽妙を悟れるもの少なからざりき、爹種一粒若地に委せずんばたゞ一粒ならんのみ。然れども地之を包み、雨之を濕ほし、日之を照らさば遂に千百粒と化し、千百粒は更に億萬粒とならん。景樹は歌道に於ける一粒の種子たりき。失墜更に失墜、衰頹又衰頹、愈迷ふて愈暗境に入らんとせし歌道は一點の光明を得たりき。景樹は歌道中興の祖なりき。之を先にしては貫之、之を後にしては景樹、兩聖あつて而して歌道は今日あるをいたせるなり。道の爲に謝すべき哉。

已に一粒實を結べり、千百粒亦實を結べり、此に於てか歌道は今や幼樹の如く、其根は愈深く地に入り、其枝葉は益中空に繁茂するを見る、而して此淺瀨の波の如きも其枝葉の一部分たるなり。今や其第二編成る、余うけて之を見るに誠に近來稀なる歌書なり。試みに二三の例證を其卷中より取りて其價値を量らん。

池みつのなみしつかなるあさけにも
　　きしのやなぎはうちゆらぎつゝ。

さくら鬪つりくらしたる舟はたに
　　うかひそめたりはるのよの月。

大路ふく風もにほひてきのふ今日
　　みやこの花はさかりなりけり。

我かとの川そひやなきうちかすみ
　　おほろつく夜にかはつなくなり。

これたゞ春部より取れる例なれど其風調の幽妙見るべきなり。景樹其門弟に敎へて云ひき

調をはなれてうたよまんとするは、燈をすてゝ火をもとめ、鎌を忘れて草をからんとする也。晝夜心をつくすとも其かいなく、歌知らずのうたよみに陷りて

論語よみの論語知らずと誰びたちて却て天地神の惱みにもれぬべし云々。

と、歌道の祕術と云ふべきものもありとせば、彼が所謂調なるものは祕術なり。之を知らば凡人小兒も歌人たるを得べく、之を外にしては學者智識も遂に歌を知る能はじ。靑年子女が僅かに齊家の餘暇若くは勉學の休暇に一二年或は二三年の日月を以て右の如き秀詠を作すに至る、蓋し導くに其當を得、敎ふるに其宜しきを得るに因らずんばあらず、即ち調の眞意を知らしむるに其道を以てするが故ならんのみ。

景樹また云ひけらく

（上畧）而し俗言と云へば鄙言のことゝ思ふ可からず、かならずくそのみそのと申すことならず。今の世のみやび詞の限を云ふべし云々。

また云はく

（上畧）古人きこえぬことをよみしにはあらず、今の世の俗言もやゝとしをへて、また聞えぬ言となりて、今の古歌を見ることし。さるは詮方なきことなり。今の世にありて古の言を取りいでゝ人の聞を煩はすは絕えてむかしよりあるまじきことに侍り。今の俗言と云へばとて鄙言を云ふべきにあらず。程につけて云ふべきことなからんや云々。

誠に云ひ得て盡せりと云ふべし、古言死語豈歌に用ゆへきものならんや、卑言野語豈亦歌を爲さんや。所謂「歌は貴賤男女おしなべて感ずべきことなり」。今淺瀨の波を通讀するに誠に景樹が敎訓に違はず、今日の世にありて貴賤男女總して感ずべきものあるを見る、試みに亦數首の例をあげん。冬の歌の中に

いねこきし賤か門田なけさ見れば
　　ちりたるわらにしもそおきける。

里川に小松菜あらふしつのめか
　　そてさむけにもふるしくれかな。

のこりなく垣れのきくはうつろひて
　　雨のまさもまむくなりぬる。

水くろまさゝろくおさもさよふけて
　　おくしもしろしかさのいたはし。

術も心あらんもの貴賤男女誰か之をきゝて解せざらんや。古語に泥まず、卑言を用ゐず、奇を弄せず、巧をてらはず、自然の實景を序せるものと評すべき也、斯くの如くにして始めて歌道は一般人民の共有する所となり、老幼男女等しく歌人たるを得べきなり。道の已に歿せるを開き、荊棘の已に茂れるを刈りそめたる景樹が功績に至つては千歳歿すべからざるは更に言を待たず。然れども其遺訓を奉じ、其創業のあとをうけて守成の任に當るまた容易の事にあらず。而して之を實際になし、青年子女數百人を教導して歌道を悟らしめたる池袋氏の功績の如き亦稱すべきにあらずや。

高調なるものは(以下夏の歌より取る)

あさかせにいけのうきくさかたよりて
　うつろわかはのかけの涼しさ。

ふけぬるか睫かむきうつおさたえて
　かさたのつきにくひなゝくなり。

ほさゝきすなきてすきゆくかたおかの
　もりの梢につきいてにけり。

優美なるものには

くれわたる野川のきしをふく風に
　うはらかをりてほたるとふなり。

ふく風に花たちばなもかをりきて
　ものなつかしき夕つく夜かな。

新奇なるものには

おやよりもまさりて見ゆる若竹は
　ひらけゆく世のすかたなるらん

幽玄なるものには(以下雜部より取る)

ふく風にたゝよふちりの世の中は
　めをとちてこそゆくへかりけれ。

さためなき世をふりすてゝ行くきみの
　ひつきの上にふろしくれかな。

實情を表はせるものには

たらちれはつゝかなきやと外國の
　ひとのたり／＼とふかうれしさ。

たらちれの母につかへん願ひより
　外にれかひはなき身なりけり。

の如き秀逸殆んど卷にみつ。以上はたゞ例證なるのみ。其全豹に至つては宜しく一部を通讀して而して知るべきなり。近來歌書の世に出るもの多しと雖も斯の如きは蓋し多からず。余が近來稀なる好著と稱するも過言にあらざる可し。

池袋淸風氏嘗て京都に至りしより徒弟に歌を教ふる至親至懇、十年一日の如く、其門に入れるもの前後數百人の多きに達せり。數年前氏の自詠と門弟の秀逸とを集め一部を公にせりき。これ淺瀨の波初篇なり。今此に評せる所のものは其第二篇、今春梓にせるものなり。余は尙池袋氏が奮然身を挺して歌道擴張の任に當り、愈進むで多くの門弟を教へられん事を希望するものなり。

八田知紀は桂門の高弟にして其歌に妙を得たる巳に人の知る所なり、然れども長所のあると共に亦短所の存するものあり、元來知紀の歌は優美、靜肅なる所に於ては桂門第一なるべし。惜むらくは風韵甚た高からず、氣骨稜々のあとなきを。弟子は師に勝らずとは千古の格言なり。知紀が西海に晩年を送せるに當て幾多の徒弟其門に出入せりき。從て歌道の達人少々ならざりき。然れども多くは彼が長短を合せ學びたるの人、否其長所は充分に學ふ能はずして其欠點をよく學べるもの多かりき。此故に知紀が死後其門下より出てたる歌人甚た多きも其長所に於ては彼に勝るものなく、反て短所に於て知紀に凌駕するものゝみなりき。池袋氏亦知紀が流をくめる人か。されば知紀が短所は明かに淺瀨の波にも存するなり。人遂に完全なる能はず、長短並ひ存する亦免れざるの數ならんのみ。余は取て其短を指摘して之を責めんとするものにあらず、公平なる批評を爲さんとせば短所も亦默視する能はざる也、著者ふかく責むるなくして可なり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

片々

○文部省と外國的敎師

文部省の官吏に、學政の事を問へば、授業何時間と云ふ事に至るまで、英は何、米は何、獨逸は何、佛蘭西は何と說法す。其の敎育制度の改良毎に理由を發表する所ろを觀れば、又亦、英は何、米は何、獨逸は何、佛蘭西は何と論證す。

○やまとごゝろ

曰く、王政は總ての事が大きい、武家時代は之に反して小さい。君臣の間柄は、王政に於ては愛を持つて成立つて居る、神の如く、佛の如く、之を取扱ひしは武家時代の政界である、然るに、今の修身書は、滿悅の容貌を以て天顏を拜し、天顏麗しく臣僚を傍近く引見し玉ふ龢は龢かで、遠くに大地にひれ伏して御駐輦を拜し奉る圖などを畫いて居る。男尊女卑は武家時代の弊風だ、然るに今の敎科書は、此弊風を改ためるヿをせぬ。王政は大きいものである、何事も大形である、王政復古の、維新のと云ふたとて、何事も王政の如く大形にならねば、其實を備へぬものである」と、福羽美靜子は、演說せり。大ひなる大和心は、自からなる日本偉人の天眞なり。歌の崇高なる粹によつて養われたる此の老武士は、大和心の一斑を顯昭したり。

○人種歷史政躰上の迷信

浮田和民君、卓論多し。慷慨して米國より歸り、チユートン人種を歷史上愚鈍なる人物とし、米國大統領の名實相違をあばき、遂に曰く、

兎角君主政治の衰ふるに從ひ忠義心を減ずると共に義務を忘れ利己主義に固着し國民の品格を下し政府腐敗の元因となる、之を防がんには宗敎愛國心敎育に依賴せざるを得ず。

總じて、學問したる人の洋行は眞とに益あり、心醉して外形にのみ迷はざるが故なり。洋行して初めて世の中と云ふものを見、而して其皮相を見、感服して歸朝して直ちに西洋にまね少しも「換骨、活用」の味ひを覺らぬものは、實に國家の迷惑也。

○歷史を重んぜよ

福地源一郎氏、同志社に學問と政躰との關係を演說す、其學

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

問とは、學問の向き方向即はち學義なりと。而して、此の學義と政躰とを一致せしむべしとは氏がお得意の持論なり。曰く、家康にして朱學を採用せしは、平生の卓見に不似合の事なり、是れ其無學にして學問上の識見なかりしに由る、氣の毒なるは知らずして用ゐたる家康なりと。櫻痴先生、經世上の涙あり。曰く、岩瀨肥後、水野筑後、永井玄蕃、堀織部等昌平黌より出身せり、彼等は自家の學義を採り之を實際問題と爲すに至れり、朝廷に奏し、諸侯に詢り、而後之を決せんと云ふに至りて孔子正名の學義果然實際問題となり了せり。此所ろ單に推考上の立說にあらじ、若し此演者をして水野癡雲に當年の心意氣を問はしめしならば、面白かりけんに。曰く、歷史を疎そかにする國家に限りて學問の政躰を顚覆すること容易なりと。この所ろ、福地君の本領なり。皇極民極の當年を憶起せしむ。

○日本本來の宗教

松山高吉君が解によれば、神道は面白きもの也。曰く、上古日本國民は、天地の主宰なる造化の神を信奉せり。此神は眼見るべからざる靈躰なりとせり。此神に事ふるとも敬虔にして悅びて神命に服從したり。天神の德を惟ひ常に謝恩の祭をなせり。善惡の靈ありて、人の心を導くものと思へり。人は肉躰と靈魂とを有し靈魂のはたらきは肉躰に勝りて奇妙なる能力をあらはす者と信じたり云々。遂に驚ろく可き斷案を下して曰く、

儒も佛も皆な日本固有の本性には適せざる者なり。されど無名無言の固有宗教は隱然として力あるが故に儒佛各各其の本質を擅ひまゝに顯露すると能はず、幾分か其質を易へ、日本に化したり。日本は宗教の山荒地とやいはまし。若し此の凶荒を救ふ可き眞宗教なくば日本數千万の精靈を如何にせん、幸に基督教ありて其欠望を滿さんとす。日本固有の宗教は滿面笑を含んで歡迎すべし。今日基督教を惡み基督教を敵とするものは、誤謬の神道、寄寓の佛儒なり、基督教を傳ふるものゝ最とも注意を要するは、此等の宗教と日本固有宗教とを混同せざらんと也。隱所に潛み居て實力を有する固有宗教を識認し相ひ提携して働らきを爲さば、其功倍從して神の光榮と共に國家の光榮も揚らん。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

是れ注意すべき一論文なり。但し儒佛と云へども、其本色、豈に今日の如く宗教味少きものならんや。何ものも時勢によりて變形せり。要は、人の本來の需求心を喚起せしめ、其心をして道教の眞髓につきて直ちに要求せしむるにあり。

○モズームダルの論文

印度人モズームダル、波羅門教と基督教とを調和せんとして、ブラモソマヂの一派に盡力す。近頃ろ、米國人に訴たへんとして米國のアウトルック雜誌に投載したる一論文、福音、基督の二新誌によつて同時に紹介せらる。吾黨此の譯文を讀むに、殆んど同感想に充つ。所云る、他人心あり、之を忖等するものか。何んぞ吾黨が言はんとする所ろを言ふものゝ如斯く痛快なるや。就中、慷慨、米國人に向つて詰問するの所ろ、氣焔万丈、吾黨が衷心にひそんだる烈火を燃やし上げたり。曰く

◎余が信ずる所によれば、印度は日に益々基督を受容しつゝある也。然れども之が如何ほど基督教宣教師の厲精によるやは斷言する能はず。

◎余は改宗せざる數百万の印度人、思慮あり教育あるの

人士及び印度國諸般の改革事業を先導せる人々を指して謂はんに、彼等は愈よ基督の精神を呼吸しつゝあるを見る也。彼等は、耶蘇の人物を尊敬し彼を愛し其靈性上彼を受け入れんとしつゝある也、然れども彼等は通俗に所云る基督神學なる者に對しては全く厭棄の念を抱けり。

◎貴國の人士（米國人に對して）は基督教神學と基督教の精神を屢々混同せり。

◎余は躊躇するとなく斷言せんと欲す、基督教宣教師輩の最多數は彼等の神學を以て最上の標目となせる事を、余は玆に神學の是非を論ぜんとするものに非ず、只だ靈性的の人必らずしも神學的ならず、神學的の人必らずしも靈性的ならざるを言ふのみ。此の二つの中其一を擇ばんには東方諸國、特に印度人民は斷じて靈性的の人を喜こべり。何をか靈性的の人と云ふ、深く神明に近接し全く神に依りて同化し、自から賴まざる健全なる活氣に加ふるに他國人の弱處と其の聖所に對して柔和なる同情の念を抱くもの之なり。基督教の隊合的運動の如きは、諸君或ひは之を誇らん、全く印度に適せざる也。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎宣教師諸君が其本國に送れる報告書を見るに、土着基督教徒間に於ける靈性上及び道德上の進步に關する事を記載する事甚はだ稀なるは何ぞや。

◎吾等が印度に於て要するものは基督の精神なり其の慈愛其の撙節、其智慧、其正義是なり、然れども彼宣教師等は吾人に與ふるに神學の鋸屑を以てし、教會政治の鐵棒を以て吾人を支配せんとす。通俗基督教の立法的論理的歷史的の機械は東洋人の想像力と同情の力とを枯稿し人間を變じて神學的自動機械となさんとするに在り。

時報

◎學校、敎育

○文部省家事科檢定試驗問題　左に掲ぐるは本年度に執行せられし文部省の家事科檢定試驗問題なり同試驗に應ぜんとするもの丶爲めに參考書類をも併せ掲ぐ、

家事科問題　（左の四問題は午前八時より同十一時迄）

一、衣服と身體との關係を說き各種の地質の得失を擧ぐべし

二、日常の食事に於て食物を配合するに付如何なることに注意すべきものなりや

三、家屋の間取に就きて注意すべき要件を擧ぐべし

四、一家の金錢の出入を記載するに用ゐる帳簿の種類を擧げて其記入の方法を示すべし

仝　（左の二問題は午後一時より二時半迄）

一、斷乳期前後の手當方を問ふ

二、小兒に與ふる玩具は如何なる心得を以て撰ぶべきや又之を以て教育上裨益あらしむるには其教導の方法如何

裁縫科問題

一、中巾縮緬にて（長さ四丈、巾一尺三寸）にて女物羽織表一、同袷布表一、右裁ち方積り方を記し且裏に用ゆる布は何尺を要するや

二、紐下二尺二寸五分の八布違ひ袴を製するに布何尺を要するや裁ち方並びに縫ひ方の順序を記すべし

三、白絹半反にて四ツ身小袖半身を縫はしむ

四、金巾木綿五尺にてシャツを裁たしめ肝要なる部分（袖口衿等）を縫はしむ

又た右の試驗を受くる爲めの重もなる下しらべの參考書は大凡左の如しといふ

家政學は　下田歌子、　淸水文之助氏の著。　育兒法は　三島通良氏のはゝのつとめ、簿記學は　藤尾錄郎氏の著、　其他婦人衞生論、　家庭教育に關する二三の書類

○女生徒の華奢を戒む　甲府なる相生學校の高木某女教師は各女徒の衣服等を見て其の華奢なること都下の學校にも稀に見る處なるに打驚き甲府は斯くも世計の度進み居るにやと內々其の實況を探知するに其の內幕は決して去る次第にあらず其の實子女の奢望心と父母の愛憐心より知らず〳〵終に今日の結果を來したることの略判明したるより斯くては將來女子教育の沮害ともなるべしとて頃日同校の諸教員と協議の上生徒一同に對し今後は華奢の風を避け只管質朴を尊ばれたく就ては成るべく絹布の衣類を用ひざる樣せられたしとて懇々說話されたりと

○同志社女學校卒業式　は去る二十八日同志社公堂にて執行せられ本年の卒業生は十二名なりし

○京都看護婦學校卒業式　は去る二十七日同校内に於て執行せられたり

○女子の不就學　山形教育雜誌記者某一日同地の佐藤郡長を訪ひ談偶々女子の不就學に及びしさき同郡長曰く本郡に於ける女子不就學者の多き實に他郡に超絶す而して其の原因を尋ぬるに槪して貧困なるが爲にあらず疾病あるが爲めにあらず又た他に特別の事情あるが爲にあらずして一般父兄の教育的觀念に乏しきに坐するのみ現に此程郡内各小學校を巡視するに堂々たる富豪の姉妹にして不就學者の多き十中七八に居るは實に一驚を喫したり若し此儘に放任するに於ては女子就學の增加決して望むへからず依て私に熟慮するに地租拾五圓以上を納むるもの即衆議院議員撰擧資格を有するものは必す就學せしむるへしとの內訓を發して此の富むへき頁家の處女をして無學文盲の社會より救ひ出し聖代の敎化に浴せしめんさの考なりと語られたりと是等の方法たる女子敎育の普及を計るに就ては至極の名案なるも吾輩は尙ほ一層女子の不就學を減せめんには更に百尺竿頭一步を進め近來稍々死法空文に傾きつゝある彼の學齡兒童就學督責規則を活施厲行して以て其弊を矯なは冀くは女子不就學者の數を減すると共に一層女子教育の進步を見るに至るべきか(兩羽新聞)

◎美談

○貞女本多よし子　は信濃國上伊那郡高遠町本多利宗氏の妻にして平素克く姑に事へ殊に明治十六年姑の不图病に罹るや爾來十餘年日夜力を看護に盡し孝養至らざるなく傍ら夫を扶けて能く家計を維持し志行奇特なるより今回之を旌表せられたり

○貞婦渡邊ゆき子　は石見國邑智郡君谷村上田國太郎母にして資性溫厚姑に孝順夫に貞節殊に夫の病に罹るや看護懇篤到らざるなく其遂に死亡するや姑既に老衰三兒尙ほ幼弱一家貧困に陷るも毫も屈撓せず躬自ら耒耜を執りて農事に服し具に艱苦を甞め孜々生計を營み宿債を償却す姑尋て病に臥し身體自由を失ふに及びて藥餌煖養意を竭し承歡倍々努め又克く三兒を撫育し就中先婦の兒を慈愛する所生に超ゆ其志操を變ぜざる茲に十餘年一日の如し洵に奇特なるにより其賞として金六圓を下賜されたり

◎片々

○アンドリー及プシチル　の兩女史が千八百九十一年即ち明治二十四年十月一日より二十六年九月一日に至るまで滿三ヶ年間、世界を遊說運動せられし報告なりと云ふを聞くに

旅行の里數	八万七千八百六十三英里
運動したる市府	百三十七ヶ所
演說の度數	一千〇二十三度
聽衆の數	十一万六千二百六十八
異種類國語の爲め通辨を傭たる者	十八
集會に於て集りたる金	四千二百〇一弗十五仙

(現今の相場にては千五百圓前後)

○橫濱婦人矯風會　橫濱有志の婦人は兼れてより矯風會を設立せんとの企てありしが過日アンドリー、プシュチル兩女史の奬勵により愈々同會を設立し去る月四日創立委員會を開き次で役員の撰擧を行ひ遂に左の如く定まりしと

會長　山本さと子　副會長　堀川みつ子　書記　城のぶ子
會計　岩元きく子　補助　山岸なつ子
又幹事として左の諸氏撰定されし由
佐久間さく子　尾島つる子　畑つれ子　中村しよ子　長　千代子　伊藤まき子

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社發賣書籍目錄

百人一首講義	鈴木弘恭大人述	全	正價金二拾八錢	郵税金四錢
文法口授	同	全	正價金拾二錢	郵税金二錢
小公子	若松賤子譯	上	正價金二拾八錢	郵税金八錢
俳諧史傳	小此木、布川同著	全	正價金三十錢	郵税金四錢
邦文學	松山高吉君著	全	正價無郵税金拾二錢	
雅俗諸體 作文口授	鈴木弘恭大人述	全	正價金二拾五錢	郵税金四錢
參考標註 徒然草講義	同 講述	一	正價金八錢	郵税金二錢
參考標註 徒然草抜萃	同 標註	全	正價金貳十錢	郵税金四錢
參考標註 竹取物語讀本	同 著述	全	正價金貳拾錢	郵税金四錢
參考標註 土佐日記讀本	同 著述	全	正價金二拾錢	郵税金四錢
女學校用讀本 國文抄讀	同 著	五冊	一冊金二十二錢宛	一冊郵税金四錢宛
淺瀨の波	佗袋清風大人著	第二編二冊	正價金三拾二錢	郵税金四錢
公娼可滅	島田三郎 巖本善治 同著	全	正價金四錢	郵税金二錢

廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 同著	全	正價金五錢	郵税金二錢
日本女子讀本初歩	吉田利行君著	二冊	正價金二拾四錢	郵税金四錢
日本女子讀本	同 著	三冊	正價金三拾六錢	郵税金六錢
漢文抄讀	木村熊二君編	四冊	一冊金二拾四錢宛	一冊郵税金四錢宛
婚姻論	横山雅男君著	全	正價金十六錢	郵税金四錢
産婦小兒 攝生法	船越鼎太郎君著	全	正價金十錢	郵税金二錢
母のつとめ	三島通良君著	母の卷 子の卷	正價金五十錢	郵税金六錢
女學叢書 本村鐙子傳	巖本善治君著	全	正價金八錢	郵税金二錢
貧兒の教育	安東松治郎君著	全	正價金六錢	郵税金二錢
昆蟲植物金石 採集法	星野慎之輔君著	全	正價金八錢	郵税金二錢
植物學	寺尾熊二君著	全	正價金十錢	郵税金三錢
希臘孝子 腓立比物語	櫻井明石君重譯	全	正價金三十五錢	郵税金四錢
應用植物編	農科大學出身星野慎之輔君	全	正價金四拾錢	郵税金六錢

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ
定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すとす。

全部十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育よ……一
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
女妻論……六十四
母學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本編纂……九十二
禮と體操……百
上 体操……百
下 女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辯……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君内助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

明治女學校出版
女學雜誌社發賣

星野慎之輔君著

昆蟲植物金石 採集法

正價金八錢
郵稅金二錢

昆蟲界
昆蟲分類
昆蟲變態
採集地
採集注意
採集器
貯蟲法
刺針法
昆蟲運搬法
幼蟲飼育法

植物界
葉とは何
花とは何
枝とは何
植物南
採集すべき部分
採集氣節
採集器具
乾腊法
標本製造

金石界
金石分類名稱
金石の現出
識別鑑定法
岩石の現出
土性の現出
土性分類名稱
土性分析法
採集器具
採集方法

麗かなる新緑の野外に杖を曳きし時、諸子は可憐なる蛺蝶を見て何かに感ぜしか、凉しき樹陰の溪流に沿ひ遠足せし時、諸兄は美麗なる昆蟲を觀て何かに感ぜしか。之を採りて直に納め、坐右博物館を開きて友を延き、一は天の美を樂み、一は研究の好材料とせんとするならん之を以て散策一層の樂み深し、多愛なる諸友よ予が採集を講ずるは、蓋し割愛耳云々之れ著者の言なり

發賣所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店

文學界

第十八號六月三十日發兌

山家ものがたり　藤村
彈琴　蟬羽
旅寢の露　破蓮
みゝずのうた　透谷
流水日記　孤蝶
時文
一夕蝸牛○きくの濱松○民友派及早稻田派○お小夜○國華○新刊○透谷子追悼會

毎月三十日發兌○定價一冊金六錢

發行所 下谷三輪町八十九番地 文學界雜誌社
發賣所 女學雜誌社書店

本誌代價

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊（半ヶ年分）	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊（一ヶ年分）	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）一回前金十錢
同 三回以上一割引
同 六回以上二割引
○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。
但し不道徳なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く。○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增を定む。

發賣所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店
發行所 東京府北豐島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷（電話十九番）